

2) 北湖におけるニゴロブナの性比

三枝 仁・遠藤 誠・太田滋規・藤岡康弘

【目的】ニゴロブナは琵琶湖漁業において重要な対象魚であり、資源管理型漁業の対象種にも位置付けられているが、その生態などについての知見はまだ少ない。そこで、資源管理上において今後、再生産量を求める上でも本種の性比について明らかにしておく必要があるため、調査を試みた。

【方法】標本は平成 11 年 11 月から平成 12 年 3 月の間に、琵琶湖北湖で操業されている沖曳網漁業で混獲されてくるニゴロブナを、沿湖 7 漁協 9 人の漁業者に依頼して収集した。集めた標本のうち、合計 53 操業分について全てに対し体長を測定した後、開腹して性別を調査した。また、標本の収集、測定については琵琶湖栽培漁業センターの協力を得て行った。

【結果】平成 11 年 11 月に集めた標本は 8 操業分 654 個体、12 月は 23 操業分 1,689 個体、平成 12 年 1 月は 17 操業分 890 個体、2 月が 4 操業分 603 個体、3 月は 1 操業分のみ 106 個体であった。これらについて性別ごとの体長組成（図 1）を調べ、性別ごとに体長の差が無いかを調べたところ、11 月、12 月、1 月、3 月において 1% レベルで体長分布の中央値に差は無かった。2 月においては 1% レベルでは差が現れたが、極めて大きな差は無いものと判断できた。そこで月ごとに雌雄の個体数を（表 1）に表した。11 月から 2 月にかけてはほぼ一定の値を示し、雌が 52.60%～57.90%、雄が 42.10%～47.40%であった。一方、3 月においては雌が 80.19%と極めて大きな値を示していた。3 月に集めたサンプルが 1 操業分のみであったことから、これを沖曳網漁獲物での性比とすることはできないと思われる。しかし、標本収集期間において 1 操業あたり 100 個体以上漁獲された標本において雌の割合を見てみると、49.24%～64.96%であり、8 割もの値を示す標本は無かった。これが、採集場所による偏りなのか、産卵行動と関係する時期的なものであるのか、今後本種の行動を把握する上でも調査を継続する必要がある。

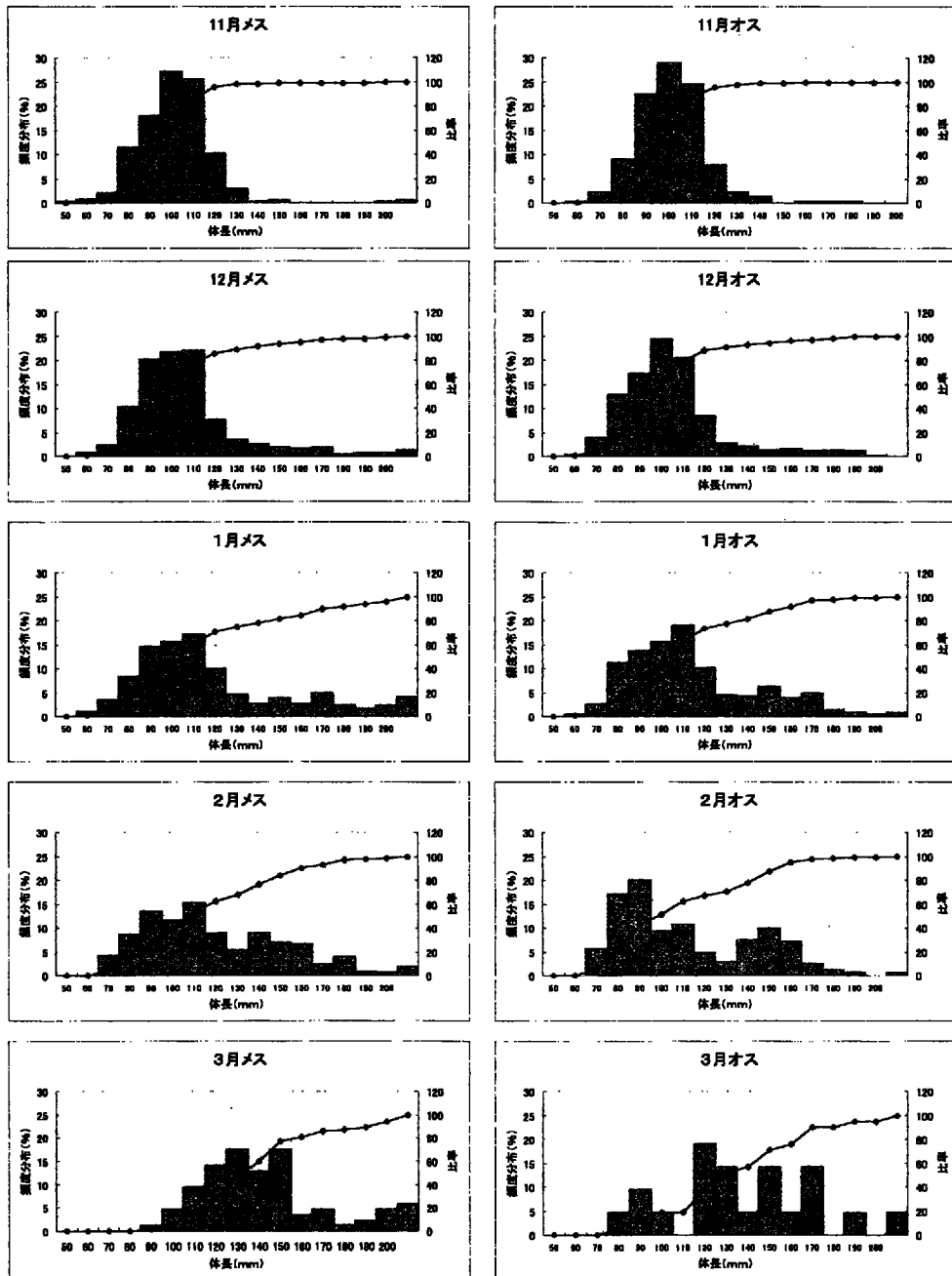


図1 沖曳網標本での月ごとにみた性別ごとの体長組成

	雌		雄		計
	個体数	割合(%)	個体数	割合(%)	個体数
11月	344	52.60	310	47.40	654
12月	978	57.90	711	42.10	1,689
1月	506	56.85	384	43.15	890
2月	333	55.22	270	44.78	603
3月	85	80.19	21	19.81	106

表1 沖曳網標本での月ごとにみた性比